

「蟹族」と「せんべろ」

大学二年頃になると学校生活にも慣れて、誰しも、何か他に見聞を広げたいと思うものです。特に、クラブやサークルに属さない者は、二ヶ月に亘る長い夏休みをどう過ごすか考えるわけですね。

もう、四十年以上前の話ですが。

地方から来た学生は安アパートに電話などありませんし、当時はスマホやパソコンなどありませんから、友人に気軽に連絡取るにも大変な労力で、伝言板、ハガキ、手紙などは当たり前のことでした。それで、おかしなイザコザもあつたわけです。

『トウカジユクニシロクジマツタケ』などなぞのような武君からの電報でした。その電報により仲間四人と、新ジユク駅ニシロで待ち合わせをしたことがあります。最後のタケは武（タケシ）だから、私は安弘で『待つヤス』となるわけです。それをマツタケ（松茸）と読むのでは私達の仲間には入れません。それでも四人とも無事会うことができたのですが、一人だけ30分近く遅れて来た者がいました。30分も？と、驚かないでください。当時は一時間くらい当たり前のもので、礼儀でもあつたのです。特に女性とは・

「なんだよー、遅いよ」

「待つ身と、待たしている身と、どちらが辛いかな？」

おわかりですね。苛立つ壇一雄に太宰治が投げかけた名台詞です。

更に可笑しいのは、彼は朝六時に来て一旦帰り、煮え返る頭を冷やしたが冷えきれない。だから、わざと遅れて来た・・・と。つまり朝夕六時を違えたわけですね。

まあ、当時の学生は仲間とつるむにも辛抱も時間もかかったわけです。それが理由かどうかわかりませんが、一人で行動するのは今と違って当たり前でした。

その頃、学生の間では国鉄の周遊券とユースホテルを利用しての一人旅が流行っていました。私も先輩の影響で北海道一周旅行をしました。夏休みのひと月をアルバイトに勤しみ金をつくり、残りひと月を計画も左程しないまま、後はどうなれの北海道一人旅をしたのです。

振り返って、何が学生時代の思い出かというところ、この一人旅ほど面白い思い出は他になかったように記憶しています。その面白さを語るには長旅に要した旅費なども記さなければ、一人旅の良さを伝えることはできないでしょうね。

東京から北海道一周二十日間有効の周遊券は、国鉄運営の各駅普通列車自由席のみと限定ではありませんでしたが乗り放題で、学割付いて二万円に満たなかったと思います。また、ユースホステルは年会費二百円を払えば一泊朝夕二食付いて七百円でした。部屋掃除も皿洗いもセルフになっている上に、起床時間、食事の時間、風呂の順番、他にも規則はクドイほどあって赤字の張り紙がベタベタあったのを今も思い出します。でも、洗濯機やガスコンロ、調理道具など十円単位の借り賃を支払えばいつでも自由に使用できたし、どのユースもクラブの合宿みたいな感じでしたから、一人旅でもユースへ着けば誰でもすぐクラブ仲間のようになっていました。

米飯は朝夕食べ放題だったので私は昼飯用にと、隠れておにぎりを作って持ち歩きました。二十日間、目一杯の一人旅経費を単純計算すれば最低二万円くらいにはなるでしょうか。たとえ僅かであってもグルメな誘惑に負けて出費してしまえば、悲しいかな。その時点で旅は終了となってしまうます。透けるように薄い懐具合を知る私にとって、ユースへの宿泊さえ恐ろしく危険な誘惑に思えるのですから、ベンチなどに野宿しての経費節約も覚悟の上でしたね。

今風のグルメ旅とはまったく真逆です。

私はあるユースではるかに凄い貧傑（ひんけつ）に出会いました。ずうずうしくもユースの軒先で無料宿泊する毛むくじやらのロン毛で、太った乞食みたいな学生なのです。W大学の八回生とかで、今年が最後の学生生活になるとか言って自慢していました。当時はまだヒッピーという呼び名も廃れず残っていたくらいですから、私も例に漏れずもじゃもじゃ頭で彼に負けないくらいのロン毛でしたが、彼とは違って三日に一度くらいは風呂に入っていました。

彼とは奇遇なことに行く先々で、希望もしないのに何故かバツタリ顔を合わせるのです。一人旅する貧乏学生は結構多くいて、旅する先々のユースで同じ学生に出会うことは珍しくありませんでした。でも彼と出会う場所はユースではありません。考えられないような野宿先で不思議とバツタリ出くわすのです。私も彼も二日に一度は野宿するせいかどうかなのか、だっ広い北海道のそれも街灯もない、人家もない、名前もない、小川の橋の下で、焚火している彼と出会った時には、お互い肝をつぶすくらい本当に驚いたことを憶えています。

それからは貧傑同士自然と気心知れるので、いつの間にか、彼は『オッさん』私は『スーさん』と呼び合う仲間になっていました。すると、同じく旅する学生たちからも『オッさん、スーさん』と呼ばれ、野宿するベテラン旅人扱いなのです。

旅のルートは自由気儘です。北海道名所名跡は、鉄道やバスの通らない場所ほど美しく面白いと先輩に聞いていましたから、私はほとんどヒッチハイクで巡りました。

背中に大きなリュックを背負って、両手を上げ蟹のように二本の指を出していればいいのです。その資格好からいつの間にか『蟹族』と呼ばれるようになったのも、一人旅全盛の時代だったように思います。

地図を見ながら『さて、弟子屈から屈斜路湖、そこから美幌峠、どの回りのヒッチで行くか』と、気儘に計画するが、『さてよ？・・・旭川から留萌に出て、留萌から羽幌もいいな』

当時のヒッチは実に簡単でした。延々と続く海沿いをリュック担いでトトロ口歩いていけばいい。トラックなら蟹ポーズすれば五割方は停まってくれました。但し、確率五割は一人旅が条件です。

「どこまで行くんかい」

「はい、昔前から羽幌、羽幌から島へ行こうと思いましたが・・・」

「海は渡れんが、途中までなら乗れっちゃ・・・アマウリ、ヤキジリかー」

「何ですか、それ？」

ヒッチで羽幌に降りると、そこから天売島、焼尻島に向かう船に乗るつもりだった。船を見た目で何トン位などと推量する技量はないから、ここは船室三十名、甲板に十名位の船とでも書いておきますか。しかし、その日は大雨の嵐で一日一便の船は出航しないことになった。でも、自由気儘な一人旅には残念に思う気持ちなどありません。むしろ、待合室にある寝心地良さそうなベンチ椅子に見惚れて嬉々としてしまいます。

「早く野宿に感謝感激、神あられ・・・」

「すみませーん。お湯もらえますか？」

早速野宿を決めて、スーパーで買いだめしたカップラーメンにお湯をもらうため、キップ売場の職員様に声掛けた・・・

すると、プーンと嗅ぎ憶えのある匂いが漂ってくるではないか、

『まさか・・・気のせいだろ・・・』

翌日、〃西南西の風良し。波、少し高し。薄曇り後晴れ。いざ出航〃などと、はしゃぐ気持ちがあったかも。

ところが、どっこい。出航十五分もしない内に、瞬く間に黒雲が湧き出てきて風雨の荒れ模様となった。ベトナム難民船と化した船は、早々に波間の木の

葉だ。三メートルの波に押し上げられたかと思うと、四メートル落ちて、四メートルが五メートルといった具合に次第に波が激しくなってくる。船底に打ち付ける波の音がドーンと凄い音をたてはじめる。甲板にはバケツから投げつけるような波しぶきでとても居られたものじゃない。私は一目散に船室へと逃げ込んだ。しかし、船室の方もこれまた決して居心地がいいわけではなかった。揺れるから何もない所に居られやしない。皆、手摺りやら壁に張り付いて様々な恰好をしている。無用心に置かれた荷物は右から左に飛ばされて散らかっているし、メス蟹グループはバケツにかたまつてゲロゲロ吐いている。酒飲みの性かどうかわからないが、私はいたって船酔いには強いと思っていた。けれど、あの二等船室特有の靴の匂いというか、足の臭さというか、とにかく鼻の曲がる匂いの混合にはさすがの私も参ってきた。降参してまた甲板に上がると、上は出口から波しぶきが凄い。海に投げ出されまいと必死にデッキにつかまっている者は、皆頭からビショ濡れだ。甲板は水がたまっているから不用意に動くのは危険極まりないのだ。

その時、私と入れ違いに船室に逃げ込もうと、男が滑ってバランスを崩した。そして、そのまま私にしがみついてきた。

「おおッ、とーッ」

不意のことだったので、私も彼にしがみついてしまった。揺れの激しい折だつたのでそうしたまま、暫らく動けなかったのだ。

「あぶないなあゝ・・」

「あつ、すまん」

「あれっ、あれエェゝ・・」

「あつ、ああゝ・・」

眉毛の太い毛深い男と、奇妙な恰好で抱き合っている様はきつと見良くなかったと思う。彼は如何にもすまないという顔で口を開こうとした。とたんに彼は下を向いてゲロツと吐いた。おつりが私のズボンに飛んできたが気にする余裕はなかった。

二時間余りの船旅も終わりに近づく頃、ようやく揺れも治まって、二人はしぶ濡れになりながら、命からがら逃れ切ったという安堵感で甲板中央ベンチに腰を落としていた。

「・・・？」

「落ちた奴いないだろうな？」

「エッ・・まさかー」

「でも、すごかったなあゝ」

「オツさん・やっぱり、待合室に野宿だったんだ」

「へっへへ、まあーね・」

彼は、濡れたチョッキの内ポケットに手を入れモゾモゾさして、ハンカチに包んだ食べかけのチョコレートを出した。

「スーさん、ズボン汚しちゃったなあ・」

「なあーに、すっかり、きれいになったさ」

二人で形の崩れた板チョコを食べながら、茫洋と、海を見ていたら、次第に明るさを増していく海は色を変幻に替えながら、見る見るアツという間に白い波頭を小さくして行った。雲も波も不思議なほどに様変わりしていく。そして太陽が雲間からスポットライトのように所々にくつきりと投げかけた。

二人は豹変していく海の様子に見惚れて動けない。瞬きさえしまいと目を見開いていた。あまりにも激しい変化、そしてあまりにも美しい変化に感動しているのだ。

あの黒雲も、シブキを上げた白波も、何もなかったかの様に消え失せると、空と海を照らす明るさは一層キラキラと輝き渡り、どこまでも続く空間へと光を放っていく。そして、いよいよ舞台の幕は上がるのだ。

暴風にちぎれ残った白い綿雲が、真っ青に澄んだ空の下、水平線の向こうまでポカリポカリと低く浮んで並んでいる。そしてその綿雲の真下だけがシャワーのように雨を落としている。なんという偶然だろう。木の葉のように揺れていた難民船はその雲の真下をすべるようにくぐったのだ。

いつの間にか甲板に出てきた蟹族どもが『ワーツ』とか『キヤー』とか言うて、汚い口を拭いながら歓声を上げた。数分間の気持ちの良いそのシャワーを皆浴び始めると、あちこち浮かぶ綿雲の周りに幾つもの虹が現れたのだ。それだけならまだ舞台幕は下ろせない。船は、又次の綿雲の下を通過した。

すると、赤い帽子のメス蟹が、真上を指差して大声で叫んだ。

「あッ、アレッ、見て！」

皆、雨に顔を濡らして天を仰いだ。この雲に後光が差したか、虹が雲を囲むように円形を描いて浮かんでいる。

何とその虹は絶句するほど美しく、二重に輝く虹だった。

造り話でない証拠をお見せしたいと思ったが、船室にカメラを取りに行こうという考えさえ浮かばず見惚れてしまった。おそらくここに居合わせた者は、誰一人としてこの光景をカメラに収める事はできなかったろう。もし、もう一度見れるものなら、いつか必ず見てみたいと思う寸劇の一つになった。

定年間近の私は仕事を終えると、ガード下のせんべろで日の沈まぬ内から一人酒を楽しんでいた。そして退職後には何をするかなど、有らぬ夢を見てはチビチビと酒を傾ける・・

すると、私の斜向かいに毛深いくせにハゲチヨロの男が、フツと何か思い出したようにこちらに顔を向けては、ニヤケている。

『・・・？』

完